

婦美車紫麿

分七寸三
分二寸五

コ
テ

紙 表

分一寸三
分三寸四

コ
テ

粹文本

夫蓋色者志按之保假與謂諺
 實哉考遠異國於夏桀有多輪
 戲殷紂有單掌氣夢相次而周
 幽唐玄之有邊羅望復倭朝二
 之不覺真偽而得馬鹿之俗况
 下下之於四民于哉豈可不懼
 矣故先聖禁魚自女色大平婦

遊婦共深破魔留則者寧受是
 等浮名雖然誇今世太平之果
 四隅于有遊廓而貴賤重代賤
 寶家國於墮落彼一子號是
 於謂百百之太魂歟因茲當世
 戲婦風俗高下之大概記号而
 謂婦爰車紫虧與于時安永三
 甲午孟春浮世偏齋道即苦先生述



好更車案格同録

抱女の愛智

生妻市れお舎

附、神のあん記

九蓮ふ 定

る楊妻舎の辰

不川肩桑也

灰巾の口台

去れ女のうと

以上

遊婦之譜并招婦之辨

遊婦といふは。人皇七十六世の皇帝。鳥羽の院の御治天に。嶋の千歳。和歌の前を大内裏に召れ。男舞を覧覧有しより。公武の機門政家。又は地下の百姓町人迄も。専ら是をもてあそび。しゆゑんのあいてとなしけるに。おりにふれては。露の情もありしよりはじまれり。いわゆる男舞は。水干に立烏帽子。太刀を帶き立まふをいふ。其後磯の禪師娘しつか杯にいたつて。水干に立ゑばしにて舞。これを白びやうしとなん唱へり。其外仏。妓王。妓女。力士。力女。枚多あれど略す。時うつりて元暦年中に。平家の一門讃州八嶋にてほろびうせ。妻子半をつくして浪にしづみ。中にも生残りたる女孀。采女。青女房は。つまなき下部に嫁ぎ。又は賤敷土民百姓に嫁し。その便りなきも

のは。長州赤間。文字。下の關。あるひは播州室の津。江口。神崎の津。浦。のの旅驛に身をよせ。玉の簪はいつしか賤の小櫛にさしかへ。ひのはかまは布のまへだれにかわり。心にあらぬ浮ふしに。行かふ旅人の袖袂。引ぞわづらふ川竹の。一夜のの手柄に。情をあきなひ。つれなき命をつなぎしより。人の遊びものといふ心にて。遊女とよぶ。故に今の遊女のはじまりは。旅驛の招女をもつて根元とす。しかふして遊女に白拍子のすへ。元暦の平家の流のおじやれ二類あり。くわしくはすへに記す。

生姜市の出會

并神明興起。九連品。定。高輪茶やのだん

抑芝飯倉神明宮と申奉るは。人皇六十六代一條の院の御時。寛仁三年九月十六日にあたつて。御神幣と大牙壹枚此所による。人民奇異のおもひをなす處

に。七歳の少女口はしりて。是は忝も伊勢渡會の兩宮の神なりと。詫言ありしより鎮座なし奉る。その後はどへて。建久四年源二位家。下野の國那須野發向の時。祈願あつて寶劔を納め。一千三百餘貫の神田を寄附なし給ひ。神職軒をならべ。神光いやまし。日ノにさかん成しに。時うつりて明應三年。伊勢新九郎氏茂。相州小田原の城主大森實頼を亡し。關東に力をふるふのみぎりに。當社の神領を掠領す。それより神殿大破すといへども。修造する便もなく年月を経る。しかるに天正年中に。諸寺諸社の絶たるを繼。すて果しを興し。神領寄附なさしめ給ふ。其後寛永十一年。御祈願によつて御修造をくわへさせ給ひ。和光のひかり利益の花ぶさにはひふかく。むかしに替らぬ靈社となれり。舊記曰。宣化天皇詔而。爲民設于諸國穀倉救。洪早

とあり。此故に飯倉の名あるか。又此御祭禮は。九月十四日より十六日迄祭にて。市の産は曲物の小櫃。菓。生姜。是等也。本朝醫方傳曰。姜去穢惡。通神明云々。頃しも秋の未つきた。木の梢も紅葉顔。きのふ迄は高輪洲崎の。涼しきかぜにむかひ興せしも。今日はむきかへ。そよ吹も風いとしく。襖の下にふさん事をおもふ。誠に暑往寒來のとはり。むべ成ルかな。爰に飯倉神明の生姜市とて。濱風はいとすさまじくはだへを通すに。貴賤老たるも若きも宮詣でし。下向にはおかわの様な飯櫃形の器に。土生姜を求め。おのがさまへにかへるとなん。此御やしろの御祭とかや。参り下向のその中に。年の頃四十四五と見へ。せいひきく色黒く。ほうばねあれたる侍。御納戸茶絹の小袖。裏は萌黄絹を付。下ぎは紬嶋の餘程なれ過たるに。綿半

はなしとみへ。羽織は空色絹の昼頃なるに。丸に二ツ引の。ぼた餅ほどなるを五ツ所に付。髪はじびんとみへ。油たぐさんに。かきたまり所々にあり。大小は大てい直打のありそふなを。くわんぬきざしにさし。ざうりは十日ほど跡にかいしとみへる中ぬきをはき。うすがきの足袋をはき。はながみ袋ははづつたそうなを。むらさきのふくさにてつゝみ。ふところ一はいに入。きよろつくつらつき。物言の鼻にかゝるあんばいは。どのやうなはんあみにみせても。奥諸侯の國詰の武さが。江戸見物ながらのぼりしとみへる。野甫田の。野呂右衛門といふ侍。三嶋町の造花。烏毛細工のきれいに見とれ。名古やがうち物の。おびたゞしくひかるを見ては肝をつぶし。大好庵が万金丹。貞冠香の匂ひに。大きな鼻をびこつかせ。飴やが傘をみては。おらが殿のかきよ

り大きなもんだとつぶやき。生姜を山のどくつみあげ。おかはのやうな器にふじの花をえがき。おみやげ／＼と。せい一はいに賣るにたましいをとばし。ほどなくおてうす／＼にてうすをつかひ。御社にうちむかひ。鈴から／＼ふりならし。ふし拜み。それより御社の後へまわれは。コリヤ／＼はじまり。これは此度唐より渡りました。虎のいけどり／＼に。はいつてみれば。三毛ねこをくちなしにて染たるにあきれ。あそこ／＼と見廻り。足もくたびれ。精もつきし處に。十六七が。お茶あがりおやすみなさんせに。涎をながし。立よれば。茶。おいでなさい。茶をちいさいふるひでこれ。くんで出せ。茶。たばこ盆で火をいける。もつてくる。茶。是あねい。もふ何時だア。茶。アイもふ八ッでござりやしやう。茶。怪しな。日はみちがいこんたア。茶。怪しな。怪しな所へ。

年かつかうは三十内外とみへ。唐棧の小袖に裏は空いろの絹。あいは八丈の替嶋。下着は空色縮緬の小紋無垢。じゆばんは白羽ふたへ。羽織は黒くないのあわせ。紋は丸にちがひ鷹のは。鼻紙袋は唐さらさの小菊尺。帯は八丈の幅せま。かみは中橋本田の出すいらす。足袋はなく。すあしに裏付をはき。脇ざしをさし。人がらすつとよく。内しやうのあたゝかそうな町人。調市に風呂敷包をもたせ。しづかにおゆみ來りしが。野呂右衛門を見るよりも小腰をかゞめ。コレへ。野呂右衛門様。よふ御さんけいなされました。〔和大和屋か。きとくだな。さあ。こゝへ。〕

〔和大〕ハイ御めんなさりませ。と服をかくれば女茶をくんです。あなたは今日いかどおぼしめまして。〔和インヤサみども。今日はひばんだアから。ぶんら。と出申たがア。和〕ハイ左様でござります。ちと高輪まで

用事が。イヤあねさん。大ぶにぎやかだね。〔茶〕アイ何モ人ばつかりで。ねつから銭になりやんせん。〔和大〕どうしても此春の焼がじやまにならふて。それでもこゝは繁昌だらふ。指さしをす。〔茶〕何さ。あそこもいふ客はね。もし一切おあそびなさんせ。ふるみせの柳屋にいのが出やした。〔和大〕これ大和屋。一切あそべとは。ありや何の事だア。〔茶〕アノやばらしい事ばかり。とおかしあて。〔和大〕あなたは御存ござりませぬ。か。此地内に女郎がござります。夜とひるを四ツに切まして。一切が七夜五分つゝでござります。〔和ウ、ハアチナ。そふいふ事は。身どもはかつてしり申さぬ。今の切のはなしでおもひだしたア。これをよんでみやれ。かみ袋よりちいさき本を大出す。〔和〕コレ是は大せつな本じや。心信をしてみやれ。〔和大〕ハイ何でこ

ざります。はいけん仕ませう。と語らう。と。あら。よんでみる。とおしつ

九運品定

一 此書は。東は靈岸嶋。深川。本所に限り。西は赤坂。内藤宿にかぎり。南は芝三田。麻布。品川にかぎり。北は本郷。音羽。板橋。千住にかぎり。都て御曲輪外に有處の色廓淨土を集む。尤當時の情婦に貳類あり。白拍子のすへ。又招女のすへ。これら也。故に色好初心の輩の。専ら修業の仕やすからんため。假に九品蓮臺に部類をわけ。其人物の貴賤巨細にわかつ。みる人笑を手にめせ。

上品上生之部 此部は吉原にはじまり。江北馬道におわる。直段付は細見にゆづる。此淨土。隨分古風にしてうまみあり。ぼつとりと

新吉原

和らかく。髪かみの風ふうはでな

らず。外そと八はちもんじはむか

しの風義ふうぎあつておもしろ

し。五ご町ちやう廓がくの内に。河岸がし

つばねありといへども。

部類ぶるいをわかつす。

チヨノマ一分
馬道

此淨土このじやうどは物事ものごとしづかに

て。人柄ひとがら髪かみのふう。地娘ぢむすめ

といふたて。いたつて人

めをしのびつゝしむゆ

へ。さわぎはならず。

上品中生じやうひんちゆうしやう之部

此部は江南の品川にはじまり。江東回向院南に終

十文七文五印
平家川

江府之臨一

此淨土は大てい吉原よしかはらをま

なぶ。しかしおよばざる

事ことは。外そと八はち文字もじ。客きやくを一

人ひと寐ねさせる事。茶屋ちやえを御

亭ていさんといわざる事。人

から尤もつと次也。其外なん

チヨノ間一分
白拍子目

此淨土は。大方淺草馬道あさくさばみち

といふたて。髪かみのふう人

がらよし。此所はなかん

づく。ひとめをいとひ。

遊びに尤もつとむつかし。但たゞ

此所をば世人せいじん獨茶どくちやとい

ふ。

チヨノ間引
白拍子
回向院前
但シ土手がはと云。

此淨土。人から髪衣裳かみいさやうの

きこなし。一ツ目にちが

わす。尤もつとさわぎならず。

但たゞ世人せいじん此類このるいを呼んで。ヤ

マネコと云。

上品下生之部

此部は仲町にはじまり。江南米川におわる。

晝夜四ツ切
白拍子
一切十二文
深川仲町

此淨土は。素人すにんといふた

て。甚はなはだ花車風流はなぐるまふうりゆうを好し

右同斷
土橋

此淨土は。大方仲町ちやうちやうにお

なじ。何れ甲乙かういつなし。世

間時花髪風まじはなかみふうは。仲町土橋

よりまづ初る。伊達だてを専

ら表とす。

晝夜四ツ切
白拍子
赤坂城

此淨土。風義ふうぎ回向院前くわうぎんまへに

おなじ。髪かみの結むす様衣裳武

家をまなぶ。あまりさわ

ぎわならず。但たゞ此所山ネ

コト云。

拾文
白拍子
麻布氷川

此淨土。仲町ちやうちやう。土橋どはしにな

らぶ。髪かみの風衣裳ふういさやう着きこな

し及ばす。其外余りちが

上品上生之部

此條深川表屋ぐらに初り。江西の行願寺に終る。

晝夜四ツ切
七拍子
深川表櫓

此淨土。髪かみの風衣ふうい装着ちやくじやうこなし。大がいは仲町を眞似る。しかし人がらおよばす。音おんよくさわぎは。大がいは仲町におなじ。

右同斷
白拍子
同裏櫓

此淨土。大てい表やぐらのどし。その外さわざ同斷。

右同斷
同白拍子
同裏櫓

此淨土。裏やぐらより少し次なり。

拾七拍子
平家新靈
四谷新靈
江府四郎第三

此淨土は。やう／＼今春じやうじゆし。しば。品川。三田。あるひは深川。所より入込。いまだ風俗きわまらず。大てい

晝夜四ツ切
一切七拍子
白拍子
芝神明地内

此淨土。髪かみの風衣ふうい装着ちやくじやうこなし。大方三ぐらを眞似る。しかし人がらおよばす。爰こゝに新みせ古みせとあり。古見せの方よし。

晝六拍夜四拍
平家品川驛

此淨土は。髪かみのふう衣い装着ちやくじやうこなし。大がいは本宿新宿を眞似。はりつよし。しかし人がら不及。なんす。りんすの言葉つかひ違わす。但橋手前は甚だ吉。向ふは少し次なり。

此淨土は。大かた赤城にならぶ。髪かみのふういしやうつきおなじ。ひとがらすこしつぎなり。

晝夜四ツ切
一切七拍子
白拍子
牛込行願寺

此淨土は。大かた赤城にならぶ。髪かみのふういしやうつきおなじ。ひとがらすこしつぎなり。

中品中生之部

此部は江東深川佃に初り。江北上野山下におわる。

晝夜四ツ切
後頭白拍子
深川佃個

此淨土は。三櫓さんりょにならぶ。かみの結ゆひふう衣い装ちやくの着きこなしおよばす。其うへ座鋪ざふにて時花歌ときはなうたをうたふ。人がらはよくなし。

右同斷
同新大櫓
白拍子

此淨土。三やぐらを眞似る。かみ衣裳いさやう。つくだにおなじ。しかしわかいもの女客にょきやくを引ひはるゆへ。米のくらいやすし。

右同斷
同白拍子
深川新地

此淨土は。佃に物ど皆准す。但髪かみの結ゆひふう。どこぞ安し。其うへ此所は。分て時花哥ときはながをうたふ。

晝夜四ツ切
白拍子
深川石鹽場

此淨土。大がいは新地におなじ。衣しやう髪あま

右同斷
八幡御堂所

りよくなし。
此淨土。石場^{いしば}にちがひなし。但し人^{ひと}から同前^{どうぜん}。

外ニ四ツ切
白びやうし
根島

右同斷
白立新地

此淨土。漸^{はうくき}と去春よりじやうじゆす。髪衣^{かみえ}しやう新地^{しんち}におなし。いまだしかとひやうなし。

白拍子
二間
二印
淺草柳下

夜四切
一切六幡
市ヶ谷八幡

此淨土。まへ／＼は人^{ひと}がらよかりしが。今は下品^{げひん}なり。衣裳^{いさう}髪大^{かみだい}てい御旅^{ごりょ}に類^るすべし。

右同斷
白外ニ五印
三田同朋町

此淨土は。髪^{かみ}のふう衣^えしやう。たいてい神明^{しんめい}を眞^ま似^にる。ひとがらおよばす。但し五印^{ごいん}。七印^{しちいん}は人^{ひと}から少し次也^{つぎ}。

白拍子
上野山下
巻軸

此淨土は。前^{まへ}／＼は下品^{げひん}

中品下生之部 此部は江東三十三間堂に
始り。江北千住に終る。

をよぶゆへ安し。右柳下
此類^{しるい}を。ケコロバンといふ。

卷六
夜四印
平家
三十三間堂

此淨土は。佃^{いづみ}にならぶ。しかしかみのふう衣裳^{いさう}着こなしおよばす。其うへはやり哥^{あに}をよくうたふ。故^{ゆゑ}に人^{ひと}がらすつと安し。此處^{こゝ}去八月^{きやうがつ}中の嵐^{あらし}ゆへ。破壊^{はくわい}して。とうぶん休^{やす}なり。

平四家
初町

此淨土。髪^{かみ}のふう衣裳^{いさう}大でい三間堂^{さんかんだう}に類^るす。人^{ひと}がら下^{した}ひん也^{なり}。そのうへはりつよく。顔^{かほ}で人^{ひと}さるの風^{ふう}。部屋^{へや}もちのあるのもおかし。カノヤ。中ジマヤ。サドヤ。これらなり。

野紫車美歸

四六
澤川入船町

此淨土。大てい三間堂にか
わるとなし。さして外に
評なし。但シ爰に昼六
印夜六二三間あり。人が
らよつほどよし。

右同斷
平家
市ヶ谷愛藏

此淨土。大がい音羽に類
す。人からは少よき方。

右同斷
平家
藤堀田町

此淨土。大ていは愛敬に
類す。評外になし。

四六
平家
三田新地

此淨土。髪かみのふう衣裳大
がい赤坂に類すべし。評
義さしてなし。

右同斷
平家
谷中いろは

此淨土。衣裳いしやう髪赤坂より
少よし。但シじしん客を
よぶ處いたつて安し。

右同斷

此淨土。三田新地に類す。

平家
麻布藏下

外にひやうなし。

右同斷
平家
江府四郎の第四

此淨土。髪かみのふう衣裳人
がら。ともに音羽を眞似
る。但シ爰は言葉づかひ
田含めておかし小有。
但シ近きころ。大ていよ
し。

四六
平家
湯澤どぶ店

此淨土。髪衣裳何れ外に
評なし。簀下すしたに類す。人
がら同せん。

四六
平家
世襲門前

此淨土。大ていどぶ店
におなじ。外に評なし。

四六
平家
津

此淨土。髪衣裳音羽に類
せしが。近き頃は人がら
衣裳下品也。但評簀下
におなし。

四六
平家
千住驛第一
江府四郎の第一

此淨土。髪衣裳は吉原の
河岸を眞似。大てい高
慢なる處也。しかし人が
らはおよばず。尤橋手
前すつと人から次也。

下品上生之部此部は江北の朝鮮長屋に始り。江西の赤坂におわる。

チヨ
ンノ間
コ
平家
朝鮮長屋

此淨土。髪かみのふう衣裳着
こなし。大てい柳の下
に類す。但シモウシノ
と呼所いたつて安し。

チヨ
ンノ間
コ
平家
魯義町

此淨土。髪衣裳ともに大
見世をまなふ。しかし人
がら及ばず。モシモシとよ
ぶ。

二夜二
品川三丁目

此淨土。髪衣裳裏町に同
じ。爰を世人チツキウト
云。

軒紫車美婦

チヨンノ間十二
萬福寺門前

此淨土は。髮衣類朝鮮に
同し。但引コトナシ。

チヨンノマ五十
安屯長屋

此淨土。大てい六間堀を
まなぶ。但し衣裳人から
次也。ヨブばかり。引ハ
ラス。

右同斷
三田同朋町

此淨土。髮衣類共にあた
けに類す。人から尤同前。
引ハラス。但シ愛ニ金平
長屋。高砂長や。念仏長
やとあり。金平長屋よし。

右同斷
平家
本郷大根島
坪

此淨土。髮のふう衣裳
甚下品なりしが。去秋
改りしより。大てい萬
福寺同前。まへ／＼のど
く今は引はらず。

右同斷
平家
直助長屋

此淨土。大ていあたけど
う前。引ハラス。

右同斷
平家
三田新地

此淨土。髮衣裳ともに丸
山におなし。但し引ハラ
ズ。

右同斷
平家
大橋六間堀

此淨土。髮のふう衣裳大
ていよし。よぶばかり。
引ハラズ。

右同斷
平家
麻布藏下

此淨土。髮のふう衣裳人
がら。ひやうなし。
淋しき時は引ハル。

右同斷
平家
淺草堂前

此淨土。髮衣類人からど
ぶ店におなじ。引事はな
し。

右同斷
平家
麻布市兵衛町

此淨土。大てい六間堀と
うせん。よぶ事は甚し。
長屋によりて引ハル。

チヨンノマ半
淺草どぶ店

此淨土。髮衣類直助にお
なじ。人から少し次なり。
爰も折と引はる。

チヨンノマ半
深川網打場

此淨土。髮のふう人から。
大ていどぶ店に類す。引
事勝れて甚し。

右同斷
平家
赤坂田町

此淨土。髮衣裳ともに六
けんばりとうせん。但シ
長屋によりて引ハル。

右同斷
平家
本郷丸山

此淨土。髮衣類人からど
ぶ店におなじ。此所引ハ
ル事甚し。キルモノ御用
じん。

チヨンノ間半
高稲荷

此淨土。網打ばに同し。
評なし。

下品中生之部 此部は江東の安宅に始り。
江西の鯨がはしにおわる。

右同跡
平家
四ツ谷殿ヶ橋

此淨土。髮衣類まへ／＼は能かりしが。今はすいぶんわろし。引ハル事甚し。此所より廿四字のきり賣いづる。いわゆる牛込櫻の馬場。横河岸。加賀原。四ツ谷堀端。あたご下。切通シ。采女が原。外櫻田。御堀端。京橋比(丘)厄橋をさかいて。鮫ヶ橋の場所なり。

右同跡
平家
個こんにやく嶋

此淨土。やう／＼ちかき比あらたまり。しかと評なし。大てい綱打どうせん也。

右同跡
吉岡家

此淨土。衣類人がちく谷に同じ。但引事甚し。こゝに四六見世三四家あり。わづか故略す。人からとぶ店に類ス。

右同跡
書羽屋坂

此淨土。さして評なし。吉岡町に類す。引ハル。

下品下生之部 此部は西ちく谷に始り。江東猪の堀に終る。

右同跡
平家
吉田家

此淨土。入江丁にかわる事なし。もしも通りかりつかまへらるゝと雷がなつてもはなさず。おそろしき處也。こゝより

右同跡
品川錦森

此淨土。去夏にやう／＼じやうじゆし。しかと評なし。但鼠坂どう前。

右同跡
平家
市谷ちく谷

此淨土は。髮衣類人がら鮫がはしにおなじ。引ハル事甚し。御用心／＼。但此所は谷町といふ。しかれども常中往還道あしく。いかなる日でりにも。かはいた事なし。かるがゆへにちく谷の名あるか。

此淨土。入江丁にかわる事なし。もしも通りかりつかまへらるゝと雷がなつてもはなさず。おそろしき處也。こゝより

も切賣いづる。兩國向薬研堀。柳原土堤。筋遠橋。駿河臺。護持院はら。飯田町。石町河し。四日市

右同跡
平家
井野家

此淨土。髪の方衣裳着こなし人がら。大てい大つへのぞし。其うへ達者

類

成は少し。病者おほし。但し舟によくのる。夜みせは行徳がしへはる。雨風の節は。永久橋または永代橋の下へ。みせをはる。此のい三人八丁堀稻荷ばしへいづる。世人を名づけて。船マンデウトヨブ。

抜

此浄土の風俗。頭に黒き頭巾を以たゞき。衣裳は常のどく。其かたち仏鉢也。モウシモウとよぶとしきりなり。

チ
ヨ
ン
ノ
マ
三
嶋
門
前

此浄土。新大橋の類。人から衣類少々。次也。世俗此類をマルタといふ。もつとも此所大橋出ばり

也。神田大工町。田町。おゝくはあたけ御船藏前よりいづる。

或人問曰。此類拔。白拍子なるや招女なるや。予答て曰。是白拍子なるべし。其故は往古平家はんじやうの時。大政入道妓王妓女といふ白拍子を。深く寵愛せられしが。此頃都に仏となんいふ白拍子時めきける。平相國めして。妓王妓女をば仏に見かへられしより。二人の白拍子いとまを乞ひ。あちきなき世を見限り。北嵯峨のおくに引こもり。かみをおろし染衣の姿となり。行ひすましてゐたり。故に今のマルクも。かたちは仏をまねび。假に情をうり。衆生をあまねくさいどする。利益のほうべんならんか。

女郎買道具

大てい黒き類を用ゆ。紋所中くらい。凸凹これらにいむ。肌着は紅類をいむ。匂ひ袋はごめん。帯はあまり細きはわろし。大てい中ぐらゐ。

油をあまり付べからず。光るはやほらしし。丸まげ本田くづし吉。月代をりたてをいむ。ひげはやすべからず。そるべし。

高祖づきん。袖頭巾をいむ。其外よし。鼻紙袋は。今様の細くせばきは。あまり行過たり。中位を尊む。

大ていはいうら付をはくべし。下駄。足駄はぬりたるいむ。

木地よし。

随分おぼこらしく見せ。口をおくきくべからず。盃の時會方の顔を見るべからず。

三會目に女郎にやる物也。あからさまにやるべし。陰して煙艸ばんの引出しなぞに入置く事。當世にあわす。

是は女郎屋の廻し。やり手。船やど。茶屋なぞにやる花の事也。女郎屋の若い者には。大

ていうらにやるべし。又此一物時分おそくやる時は。此者どものつら。三角四角になつて見にくきもの也。随分一寸／＼と打べし。

但し露といふは。此者どももひかる

ものをいたゞくと。俄に追從輕薄のありたけ。のみたくない酒をのんだ。きゝたくもない口をたゞいたり。客の機嫌をとる。たとへばかれしほみたる草木も。露をうくれば元氣ぐつとよくなるゆへ。此ゆへをもつていふか。

此ほか女郎かいには。心持并道具あまたありといへども。古のどうかく先生たち。世にはどこし給ふの書あまたなれば。かれにはちて其二をこゝにあらわすの已。

九蓮品定大尾

大和やハアチこれは面しろくて。そして私どものやうなふあんないの者には。まづ重寶でござります。どふして。南さればさ。これについて。すとなだはなしがある。タアとろ／＼といねむりし

夢ころに。さもやせおとろへたるばうすの。身には所々やぶれたる。紹の十徳をたゞ一まひ引はり。肌あらわにみへ。右の手には。錢にてこしらへたるしやくじやうを持。左の方には。夏箱とやらをもち。忽然としていわく。善哉／＼。我はこれ江戸橋本町に住せし者なり。元はわれ芝因縁山にて。一文字の席にもつらなりし。了間といふものなるが。ふと南里の香ばしき色香にまよひ。なほ手茶屋の吉川といふ古狐にばかされ。仏のいましめの五戒を破きやくし。師のめいたがひしゆへ。山を追いだされ。かなたこなたと流浪し。諸方をへんれきし。ある時は大凡俗の奴となり。又はのたなき賣主となりつら／＼とあんなるに。われ師の命に違ひしも女郎ゆへなり。何とぞ今江府中の遊くわく。米の尊卑をあきらめんと。あもひし事もむなしく此世

をさる。されどもさいごの一念によつて。色欲界に生じ。どうらく如來と改名す。然るにわれ一端おもひたつたる大願空敷せじと。通力をもつて。尊きは上品の吉原。卑は下品の井の堀のむさき所まで經めぐり。終に一卷の書に録す。則だいて九蓮品定といふ。さりながら。此書の仇にくちなん本意なさに。今其方にあたふる也と。汝此書に眼をさらし。野呂田野甫右衛門を通粹とも變名せよと。いふかとおもへば跡方なく。そこで身ども目さめて見れば。枕元にこれがある。よんでみても四切の一切のが。どふもしれなんだが。今貴様のはなしで落付た。と惣身よりあふしんがる。俵はそばにひかへし茶をがぶく。もひとつ。和太なる程。きめうなお夢でござります。何んとそのいわぬに一切は。和太おれは其切とやらはきらい

じや。とかく吉原が品川がいづてな。和太ハイさやう。しかし吉原はまだできず。いつそ今から品川へおいでなされませんか。おとも致しませう。俵ア貴様がふるまふか。そんならいかふが屋しきがさ。和太ハイそれは。ついさら／＼と一筆かいてつかはされませう。中立を出しあ。俵そんなら。あの小僧にもたせてやつてくれめされ。とさら／＼と内へかへつていわふには。だんなはこん夜おやく所に御用ができ。おとまりでござります。明日の朝むかひにこいと。おつしやりましたといへ。そして此お手紙はかへりがけに。お上屋しきの御門へおいでゆけ。かならず高輪へ行たなどとみせていふな。口上をわすれるな。市調ハイかしこまりました。さやうなら私はさんじませう。紙を取てふところへい。和太サ、おたちなさりませ。あ

ねさんお世話でござりました。ときんち錢をいだしおく。野甫右衛門立いづれば。谷山下谷打過。ほどなく車門をいて。あかばね橋。しんさみ四ごく町過。三田を打通り。漸くもと札の辻にさし掛。和太アもふまち合へさんじました。和太フンはておもしろい名じやなあ。和太元此待合と申は。登り下りの旅人の待合せるのでござります。今では品川がはんじやういたす故。此名がおもしろく聞へます。俵フワなる程。イヤおれは貴様におれ入た無心があるて。和太とは何ンでござります。俵ヤ別の事でもない。今夜貴様のもめで品川へいつて。御ン女郎をかつても。ふるとやらふられるとやらにあいでもすると。ほうにふる事だアて。なんと女郎にかわいがられる仕方をおしへ給へ。和太ハチ又めつそうなとばかり。おまへよりわたし。たれぞにどうぞ傳授いたしうござります。しかし女郎かい。心

持が第一とぞんじます。世間の人が皆女郎をかふて覺へて。わるじやれをいつたり。したりいたしますゆへ。金銀おたくさんにつかつて。ふられるがおほうござります。まづ女郎をかふは。向ふにかわれた氣で。あまりくちかすをいわす。あなをいわす。外の色里の噂をせず。女郎にもたれるが客の穴さ。しかしのみたい酒をのます。食もくわすしよしんぶるは。けつく鼻毛をよまれるものさ。ぐいのみは大がいにして。ちと惚れたやうにみせかけ。あまりびたつかすくろめると。高尾をみるやうなはりのつよひ女郎でも。ふるといふ事はござりませぬ。〔傳〕フンハテナア。そして初ての盃が。大ぶんむつかしいといふが。どふするなア。〔和大〕アイそりや一座の多い時のとさ。なるほど品川は客をみくだし。かいこなすに大ぶんはねがおれると。女郎に好きな人

が申ますが。今では結句吉原が。米がやわらかく。客を大事にいたし。かよいいそふにござります。〔傳〕コレ御ン女郎をかふには。大ぶん講釋のあるむつかしい物じや。深川は又どふいふあんばいだなア。〔和大〕ハイ深川は。しんびやうな者が行と。氣ちがひになります。わたくしも此春焼まへにさそわれて。仲間へまいりましたが。先深川の客は。さつさおせ／＼きたさのさとさわぎて。せんかうがたち切と。すいと歸るが深川のたて。そこで女郎もうは／＼うはついで。なか／＼しつほりと落ついた遊びはなりませぬ。何かと申うち七間へまいりました。〔傳〕これが七間茶やといふのか。大ぶいゝ女がみへるの。こゝはれこさができるじやないか。〔和大〕アイノおまへよく御ぞんじでござります。それで高輪のころび茶やが。きつけれんひきさ。十八町の内ころびでないのは。

救ゆる程はかござりませぬ。〔傳〕ウツサ。とかく色のよの中だて。是は何といふ寺じや。〔和大〕ハイ是はせんがく寺と申て。かの四十七騎の石塔がござります。何かと申うち石橋へさんじました。是からみんな茶やばござります。〔傳〕何ンじや。大きないへかばねじや。茶やか。〔和大〕さ様でござります。石橋萬と申ては。留守居茶やのてつへんさ。〔傳〕フンときに貴様は。寄つけの茶やがあらふなア。〔和大〕ハイもつとさきでござります。モシ高輪の大佛と申は。此寺でござります。本尊は五智の如來。こゝに名作の石の仁王がござりましたが。ぐづ(れ)て今はないそうさ。〔傳〕ハテナ。高輪の内には大分いゝ寺があるて。とかく品川の客は。坊主が多イそふだてなア。〔和大〕ハイなる程。坊主が五分。武家方が三分。町人は二分はかござりませぬ。そこで女郎があつかいにくい武ざと。是はしたり。武家

と坊主とくろめてゐるから。深川なぞとは遠つ。あそびいゝほうでござります。はなし／＼行に。きた町もすぎ東福寺まへもちとをり。仲まちへさしかゐる。モシ野呂右衛門様。奴がなじみの茶やへ。程なくさんじしました。さあおはいりなされませ。〔庵まづ貴様ささへ。〕〔和大〕さやうならば御めんなされませ。つとはいれば。茶やの女。和清さん。おいでなさい。さああがり。おつれさんおあがりなさい。〔和大〕ふか久しぶりできたせいか。上り口が高い。〔和大〕和清さんの久しいもんさ。右衛門。大和屋も座鋪へあがる。女ちやをくんでくる。〔和大〕かみさまはど煙草ぼんをもてくる。こへ。〔和大〕嬢さんはおくの座敷におります。大和やは髪をつかま。じやらくらとして嫌がらぬてゐる所。女ばうおく座敷よりいづる。〔房女〕これは／＼和清さん。あなたもよふおいでなされました。和清さん。お前さまはなせ久敷おいでなさいせぬ。

おゆかりさまからは日ぶみ。けさはわたしがとこへまで恨のお奴。といひながら七八本蒔す。〔和大〕何んのおしきせの長口上。すき紙にでもしな。となげいさせば。無理に入る。〔房女〕モシおまへさんがたは。二かいへおいでなさい。〔和大〕おつとし／＼。サ野呂右衛門様。おあがりなさりませ。野呂右衛門はさいせんより。物をもいわず。目をひからし。眉でいきをしめくりにあつた心にて。うつかりとしてゐたりしがふせう／＼に二かいへあがる。和清は跡にて何やら女房が耳へ小聲にて呼ばうなづく。和清も二かいへあがる。〔房女〕新介は宿からまだかへらぬか。かへつたら松坂やへしまひにやらにやならぬ。なんぞ二かいへ出す看があるか。〔女ア〕こちのたに芝海老がござります。〔房女〕芝海老も久しいもんだが。といふてせわ二かいへ。盃酒有いづる。〔奥座敷〕年の頃四座敷よりかみさん／＼と叫ぶ。十二三と見へ。せい高く色黒く。高慢づらなる坊主。黒郡内の少ゝあかじや

れたる小袖。合着は飛色純の。古着やにみせたらば。見で十七八の直打くらの小袖。下着ははい毛色の白無垢。帯は紫のひらぐけ。鼻紙袋は毛留の利久形。黒ちりめんの衣を脇に置。いけもせぬしはから聲にて。あふ坂とり杯と。盃臺にてひやうしをととり諷ふてゐる。今ひとりの客は。年の頃廿斗にみへ。にうわなる坊主。御納戸茶郡内の小袖。下は白無垢を着。随分人からよい客二人。一ざと見へ。さいせんより酒をのみてゐる。〔僧若〕わたしは酒は。そのやうにたべぬ。これ／＼。落る。〔女ヤ茶〕何んのとでござりやす。多くは。すけてあげやせう。〔僧ア〕エ、うまいな／＼。どふしても若者は格別ちがつたもんだ。〔茶づる〕これはおかまい申も致しやせぬ。宜敷おあがり。あなた。お合でもいたしせいせうかね。おまへさ

ん方は宿へおいでなさいせぬか。僧マ年其

氣も少／＼ありまさいくさ。まづかみ

さん。一ツさしやしやう。と盆をさせば女房取ていたゞく。女

つむ。僧マ年何んと松坂やの初かせはいや

んすかへ。ばうおいでなさいす。おな

じみでゞもござりやすかへ。僧マ年い、エ

あいつも大きなつらだ。龜坊。どこに

しやう。僧若ハイわたしやどこでも大事

ござりませぬ。おまへのおなじみの處

へ参りいせう。僧マ年おれがなじみの所

は宿中がみんななじみだ。どの女郎や

でも。あがりだんにおれが顔がみへる

と。哥橋さんが來なんしたと。家内が

そうにたつけれど。今夜はちとよう

をかへて。顔かくしのすい行さ。おれ

がいつたをしないと。こは色の長治や。

八百彦だ事の。吾妻だの。三蝶だのとて

くると。だんな申一ツつかいませうの。

やれ語りませうと。たのみませぬにお

はい／＼をぬかすと。やかましくて肝

心のしつほり遊びがだいなした。もう

／＼げいしやや役者に近付が／＼い

と。錢銀がいつてならねへ。僧若モシ其

三蝶とやらは。浮世が／＼じやござり

ませぬか。僧マ年ワ、てまへよくしつてゐ

るな。何さ。いゝとてろくなとはい

へいねい。浮世が聞たか。兩國しぼり

を呼なさりませ。みたが／＼。長哥な

ら露友でも。音藏でも。市十郎でも。

三味線なら。金藏。六三。喜三郎。作

十。豊後なら。もぐさやでも。いつき

でも。文字でも。又若太夫でも。儀太

夫も。人形つかひも。みんなしつてゐ

る。こわいろなら。こまでも八百でも。

十町。魚樂。三芝居の太夫元を始。の

こらすくるから。正じんの身ぶりをさ

せてみたが／＼。ばうモシあの。おまへ

のとこへ。八百藏がまいりやすかへ。

わつちやどうぞ扇子へ。哥をかいても

らいたふござりやすよ。僧マ年ハ、ア、嫌さ

んがきつい延さ。何よしねへ。八百め

はねつかからかけねへ。此中もさる所の

おむすが。あせ手ぬぐいに哥をかいて

もらいたがつてよこしたから。八百め

にかいてやれといふたら。迷惑がつて。

どふぞおまへ。書てやつてくださりま

せとぬかすから。おれがかいて。そし

て八百がかいた分にしてやつたら。そ

れをうれしがつてもつてゐるげな。そ

れともせひほしか。かゝせてやりませ

う。八百はさておき。梅幸でも。慶子

でも。親玉でも。おれがいふとならな

んでもなら芝さ。のふ龜ぼう。橋龜あい

さやう。もし。もふ日がくれます。ど

こになさります。橋若ハ、たどこでもよし

のくす。まづ道／＼しあんしやう。母女

せ。新介はかへつたかの。と女房あつて
新介はとよりかへり。おくざしきの。介新 モシ お
はなしをたちぎして小ごにたりの。
かみさん。あのきやくは合点のいかぬ
物でござります。あんまりあいつけず
と。いゝがげんにしておきなはりやせ。
ゑてあげくには。勤がねへなどいふ
物でござりやす。ありやばうずの白も
くでござります。房女、おれも如才は
ない。しかし。わかい坊主がもめるの
だ。そうさ。人の物で遊ぶさまで。い
けもせぬ高慢ばかりいつて。そしてな
りをみさつしやい。さんごじゆとりの
黒ん坊をみるやうだ。二人してうはきを
出納をしてゐたる女。
かつてへいづる。女。衣 モシおかみさん。客
衆が羽織をニツかせとさ。房女、それ
たんすの引出しにある。ふるいちりめ
んのわた入を持ていきやれ。どれ和清
さんはまだどろふ。と女房二かい
下座 二人座
敷の客番。立て帯をしめなをし。女持きたりしく
る縮緬のあかしやれたる羽織をき。袖を一ふりふつ

てつとつき。ふところより紙をいだし。頼きはよ
り顔はふきいふやれ。わがおもふかたへなぞ
と。いけもせぬちよくをいひ。袂より袖づきん
を出しがぶり。あつぱれおれこそ。三國一のいろほ
づきんをかぶりはながみ袋をとりいだし。何やら
だいていづる。女に渡。勝につ。女 新介どん。お出なさ
るよ。介新、アイもふともしてもよからふ
なふ。庭へおり。二人のはき物をなをせば。
頼明、これはわかいの。太儀だの。あねい。
かゝさんへよろしく頼んす。女、アイおゆ
るりと。おむかひは何時に上ませふ。
頼明、さ。もしふつたらあつづけさ。
龜橋、さいきの松原。頼明、アイまいりませ
う。お世話でござりました。と二人は
きにて。頼、コレさつ。ちやうちんをつけ
てゆく。和清さんがおいでなさるよ。野呂
右衛門は。最早宿へ行んと二
かいをおりる。女房もおりる。清和、アノ、新すは
どふした。房女、宿へまいりました。さつ
をおつれなさりませ。清和、それはなをよ

し。これおむす。行かんか。うまいおい
どだ。とむすめがし。頼、エ、和清さんわる
い事を。二かいでもいつそ。清和、これ
。そのやうなる事は。せんちうにて
は申さぬ事にて候。房女、モシありや。おま
へに氣があるそふさ。いつそ上やしや
う。頼、また嬬さんが。久しいもんさ。
房女、イヤア、もいませう。もふおれが女房
だぞ。清和、コレヤ大和や。もふ行ふじやな
いか。清和、アイさんじませう。清、イヤ、御内
室。お娘ご。終日お世話でござる。
下女、さつは二人のはき物をなをせ。清、野呂右衛門
は。和清ひよくくとしてば。清、おなじく
はき。かど口。房女、モシ和清さん。大ぶあがつ
たね。又はつさんが大ていの事じやご
ざりいますまい。清、エ、何。あのべらばう
めが。こんやはさつ。どこぞへ初會に
上るぞ。女、房女、角がはへやしよふに
よ。お二人さまともおゆるりと。おむ
かいはいつもの通りに。おかごに致や

しやう。御機嫌よふ。のしりのながいを聞きなまし。いであけぬと。おやうすまなさいせの。しりのないものも。所わゆるしぞか

品川宵の景色

品川岨雲遠帆歸西^にと詠めしもむ
なるぎききくもにんははるに
南山岨雲遠帆歸西^にと詠めしもむ
べなるかな。高輪より見晴す空は精
／＼と。東は上總。下總の。安房につ
づける山／＼に。深川。檜州。洲崎ま
で。波にうつろふ沖津浪。西は羽田平
間まで。見へ渡りたる浦／＼に。網引つ
りする蟹のいさり火は。星辰おちて浪
に入かとうたがはれ。八ツ山より冷し
ささそふ風には。あたら酒の酔をさま
し。松風の音は信濃^{五印}にさゝ並木。
五印^{五印}だんだんア竹籠にめしませんかと。
五印^{五印}ひつらつくく聞三玉^{五印}の神は。岸野
五印^{五印}九郎助ならぬ倉のいなり。幾千代

もかはらで客のおいでをと。うつ拍^七
五分。十^九。か。手も佐渡や^七
うし。大みせ。か。手も佐渡や^七
ざしき。客は竹籠にゆらる。柳^{五印}
し。これや此山崎^七
おとり。待藏し田^七
淡^{七印}。一座を駿河^七
新宿と。一。吾妻あそびをけふやあす。
またいつきなんすと。通ひくるはを松
坂や。七^五。十^九。教^七
どふやかうやと信濃^七
る。浅間／＼にうすけふり。ちどに心
は村田屋^七
大みせ。きとてか戀しかろ。客は伊豆
蔵印は小みせ。七^五
を松本や。七^五
松や。七^五
もれいづる。額の月は福山^七

黒門か。おぼろげならぬ御殿山。彼
越前^十
や。これは又。武さしあぶみの東海寺。
香のけむりが女郎たちの。そらださか
ほる丁子^七
の國^十
いわぬ心をば。いわでおもひを新叶^七
七^五
／＼ならぶ家／＼に。てらすともし火
煙草盆。津川^十
花あやめ。梅^七
ぞ引わづらふ。客ははうろく宗十郎。
がん盗頭巾や袖頭巾。くら／＼ぞめき
のほうかむり。あんまはりのりやうじ。
蛤／＼大蛤と。けしからぬ大聲も。
さとからめいて面白し。コリヤサと持込
竹籠は布引に。見通しに引三味せんは。
わが魂をうばふかと。浮れうかるゝ弁
天屋。千代をとぶくだいの物。

若い衆たのみいす。と。みせへ持ちくる
たかつきの。菓子かしは金澤かなざわくわしや。色
／＼の。なかにうまいもあるへい糖。
花はうろなる伊勢屋いせやきや。ぬけ参り。と
をれ／＼の聲は村田屋むらたやきや。むらちど
り。高の字に家／＼の紋付たる挑灯は。
西や東や行ちがひ。黒ちりめんのいき
なふう。誰さんじやないかと。のびあ
がる。いたづら髪や盛さん。かくなが
ぶみに引かれよる。客は即心成仏の。
屏風のねはんに入る跡は。いかなる夢
をかむすぶらん。實品川浄土のにぎわ
いは。帝釋天の住給ふ。喜見城のたの
しみも。爰にはいかでまざるべき。

夜中の口舌

壺和清さん。よふ酒を呑のみなんすによ。
今あねさんが来なんすよ。
がこわい物か。唐なすでも喰へといへ。

新造 おやあんなと。いつつけやすに
よ。和清があいかたは部屋へやもちに。年のころ廿
一二。きりやうよく。座敷二間。床違ひ欄。
紺三味線。甚蔭襦袢じんじゆばん。其外は夜具。崩賣地の錦。
翠地の錦。紫縮緬の夜具。蒲團三通り。長持重簀箔は
何れも銀鍍銀物。衣桁迄も立ならべ。きれいき實に
吉原の中三にもおとるまじきにて。今宵は茶屋より
和清が来りしをしろせ。しまい居たるに。なじみの
客来るゆへ。新造を出し置。または夜半ゆへ。和清
にわけをはなし。かのきやくの所へ横よこ。
に行。今廊下をはたりくとかへる。
てまへたちはいてねや。そしてあすの
朝。無粋さんがかへる時しらせやよ。
新造 あい／＼。和清さん。おやすみな
なせ。もし。あの羽細工の鶏と。芥子人
形をわすれなんすなへ。ふたりはつれ。
いつらが。鶏と芥子人形を買てくれろ
と。宵からやかましくてならねい。
おまへも。またいつからか。だましな
んすからさ。買て来てやりなんせ。も
ふ八ツでござりんす。ろくにねなんせ。
りいす。そして早いおかへりさ。もち

つといふ夢をみればい／＼に。
とでありんす。よふどくをいひなん
す。と和清をむり無たいに床へひきずりあげ
る。郎も同じく夜着へしごきをきこっている。
郎 おまへはそんな事をいひなんして。
わつちをいぢめなんすけれど。なせ此
中内は久しくきなんせんで。藏田やへ
行なんした。此言譯があるなら云なん
せ。どふだ／＼。
あんな。郎 それみなんせな。言譯はあ
りんすまい。そしてまた今夜も行ふと。
茶やでいひなんしたと女がいつた。
何さ。それはうそだ。ほんに此中は。
屋敷の役人衆にさそわれて。附合斗り
にた。ソナナラ今宵行ふと。なせい
ひなんした。と和清がふともい。
あいた／＼今夜はうらに行ふとおもつ
てさ。今夜はうらに行ふとおもつ
てさ。大ぶ今夜はい
いばんだ。さやうならこふいたし
う。とあちを。押のい。おまへの

すきにさせる物か。

と和清を。てまへ五引かへし。鼻をつまんだ

り。こそぐつたり。いろ／＼面白／＼うちら。跡は小聲のぼちや／＼はなし。何かほかにはしら紙ののべの紙やし。

侍野田野田右衛門は新造をかい。侍野田野田右衛門は新造をかい。

が。此新座床へ九つ時分に來たり。元來大ねぼうにて七つ時分までぐつと寐。そのうへ肝心の所にてふり付しゆへ。大きにはらをたて。おきてておこす。

右衛門和清／＼おきめされ／＼。おれは

もふもとるから。跡からゆるりと歸りめされ。和利なせへ。まだ夜は深ふござります。もちつとおやすみなされませ。

侍イヤ／＼。夜があけないでも大じお

ない。和利へて扱おまへがおかへりなされば。私も歸ります。まづおまち成ませ。

和清は起きて帯をしめれば。あいかたも和し。おきも。無草すつけの。右衛門へ出え。

和利そしてあの女郎衆は。どふしんしたへ。侍女郎衆はよく寐入てゐられます。

大和や。おれはかへるぞや。和利でもお前は御門が。

和利もしおまちなんせ。女郎衆を呼で來やんせう。あのこもあの

子だ。どふしたやら。

女郎立て野田右衛門が新造を呼に行。合

方の新造は目を覺しければ。野田右衛門がゐるゆへ。めをこすり。和清が座敷へ寢に行所。廊下に

と和清が合。新造わつちが客衆は。おまへの座敷にいやんすかへ。和利いやんすかじやないはな。さつきからわつちが座敷へきて。歸らふとていざをいふは

の。それだからわつちが背に。薩摩と

あのやしきはむつかしい。なげなんすなと。あれ程いふて聞せるのに。なせあつかひなんせぬ。そしてうらをよんで三會めをくると。おまへのためにも

い。氣のとふらぬ。和利何さ。わつち

がちつとねたとて。それから何んのか

のと。エ、モシ、みな／＼さだ。と二人して和清が／＼だまされど。野田右衛門がてんせず。いよく／＼は高になれど。和清もてあます。

和利コレ申。其やうにおつしやらすと。ま

あ私が申事をおき／＼なされませ。和利

や／＼。何もかもいらぬ。背よりのしかたが氣にくわぬて。愛のていしゆをよ

びやれ。和利へておまへ。これ敷の事に。

ていしゆがよばれますものか。若もの時には若イ者といふがござります。和利

そんなら若いものを呼びやれ。まづ背からあの女郎衆が。おれが一言物をいふと。ぐづ／＼わらひおつて。そして

夜食をくひに行とて。どこへか行おつて。おれをば九ツ迄煙草盆のばんをさ

せ。うせおるがさいご。寐るときはあしかのやうで。あげくのはてには。むし

がかるの何んのかのと。むつかしい事をぬかしをる。ふとい女郎めだ。何ん

と和清。仏のやうなおれでも。腹がでんぐりかへるまい物か。

和利アイなる程。段々御尤でござりますけれども。あの子

がわかいから氣がつきませんのさ。和利ッテ第一大せつな金銀を出し

て。一夜なりとかへば此方のすきだア。それにどふまいつた。かうまいつた。隣のばあさま茶をまいつたと。しつか

い身共をば。今お江戸ではやるおち
やとやらにしおる。何でもそうたいの
しかた。一／＼吟味せにやならぬ。清和
清。其若いものとやらを呼びやれ。清和
はいかしこまりました。とかく何もかも
私に御めんじ下さりませ。そして又
あの子がむしのかぶるも。客にわけの
いわれぬ。何んぞかぞか。と和清。野呂
口をさしよせまやけは。少。野呂そんなと
なら。はやうぬかしおればよいに。清和
が合方の女郎は野呂右衛門が合方の新造にのみこ
ませやう／＼だましつれ来り。廊下にて立ちよせ
し故。座敷へはいる。郎女モシエおはらもちち
んせふけれど。あの子が年がゆかぬか
らね。おまへさんのやうな粹な客衆へ
は。わけをいひなんすりやい／＼けれど。
そんなともいひなんすずに。ねたり
何かしなんしちや。すみんせぬけれど
ね。今ぬしが歸りなんすと。和清さん
も歸りなんすし。そふなるとわつちら
が。茶や衆へたちんせぬから。モおつ

つけ夜があけんしよふ。それまで一ね
いりおやすみなんせ。あや梅さん。つ
れ申ていきな。造新アイおせわでござり
いした。おやすみなんせ。モしわつちが
部屋へおいでなんせ。野呂イヤ身ども
は。夜明まで爰にゐませう。造新おや。
ばがらしうありんす。和清さんも。は
つさんも寐なんすよ。清和モシそれでは
まだどふか物があるやうで。氣味がわ
るふござります。先あれへおいでなさ
りませ。といふにいややの。何んのかのと。
なり。新造に手を引かれはく。清和ヤレ／＼う
まひさい中おこされて。大事の夢がひ
へかたまつた。これからちつと見なを
そふじやあるまいか。郎女アイそれもよ
うござんせう。と女郎はしこきをそとて床へ
へはいる。清和何んとあの野呂は。はくの
ついた不粹だの。郎女アイそれはそふだ
けれど。あのあや様かわるふありん

す。ぬしが背にいひなんした通。たい
ていいひふくめた事じやありんせん。
それにまあ。清和ハチ扱それも道理じや。
なりをみたがい。しつかいたかまが
はらといふ身だ。そこでつい虫もかぶ
つた物さ。郎女馬鹿らし。よしなんせ。
もふ鶏がうたいんす。ねなんせ。の聲もひ
あとしらなみや床のうみびようぶのうやいかな
らん。ねずのばんがうつひやうし木も。きぬ／＼つ
ぐるとおどるきて。かぞへてみれ
ば。一イニウ三イ四フ五ツ六ツ。

東雲のてれ

〔座敷〕もふ何ん時だ。やれ／＼。さつ
きからやかましくて。寐られるもんじ
やない。ありや。誰が客だ。郎女誰が客
か何んだか。わつちやねつから知りん
せぬ。橋本こりやきついのはめだ。する
たいさへぬは。もふ茶屋が來そふなも
んだ。といふてあんどろの火にて。煙草をすい
け吞てゐる所へ。ちや屋のわかいものは。
かいにくる。介新お迎ひにさんじまし

た。とせうじの。〔橋〕ラットこつちへはい
外からいふ。〔橋〕つた。大じなしちの煙草ぼん。〔助新〕
ハイさやうならごめんなさるませ。とせ
を明て内へ。〔橋〕先生明るのか。〔助新〕ハイも
ふ明々ましてござりますが。少しほろ
ついてさんじました。〔橋〕ハテいきだな。
けふはあやうかしら。〔助新〕ヘイどふぞ。
けふはおいでなさるませ。〔橋〕まづ龜と
そうだんしよ。これ若い。年が寄
とおへねわへ。いにしへは女郎にも
とめられたが。〔郎女〕アイこりやおかしい
せ。居なんすなといやしまし。ゐな
さるなら。いつ日でもゐなんせ。わつ
ちや。おまへのやうないきでしやれた
客衆を。色にはしい。〔橋〕エ、何んの事だ。
おきねへ。〔郎女〕ほんにさ。いる事があり
んすよ。〔橋〕えあんまりかけてくんなん
すな。そして又何ににしなんす。〔郎女〕アイ
わつちがかわいいひ男の。根付にしやん

す。トロへそてを。〔橋〕イヤあてこともね
て。いわらふ。〔橋〕イヤあてこともね
へ。此女郎はおれをばしつかい角さ
くの達摩だとおもふさふだ。ト大きに
く。起きて帯をしめなしてゐる所へ。一座の龜橋
はもはやしたくをして。羽橋が座敷へきたる。合か
たの女郎は中どしにして。きりやうも大てい。人
づからよく。龜橋がおぼこにみへ。おとなしきに
たき心にてそてくる。〔橋〕哥橋さま。かへ
りませう。〔橋〕さ行く。こんな内へふた
ゝびくるもんじやねへ。といへば。二人の
橋をじつとに。〔橋〕これから又巢をかへて。
けふは居つゞける。〔橋〕何にいたせ。茶屋
までさんじませふ。〔合〕かたどふぞ。この
ごろに來なんせへ。〔橋〕きついきまりだ
な。さあ。あよびや。〔合〕かたきついいお
せさ。おまへはどこそへいつて。い
女郎衆をかいなんせ。おまへのやうな
業平の毛のないやうな色男を。きやく
に取女郎衆はしあわせだ。〔橋〕やかまし
い。あんまりしやべるな。いま／＼

しいやたい骨だ。といひながら。廊下へてゝ。
とにて。何やら合かたとはなしをし。女郎二人も。
龜橋もはしごをおり。みずへ出れば。若い者さうり
をなす。二人
〔女郎〕わかしん。このごろに
へ。〔女郎〕よふおいでなされました。ま
た此間に。茶やさん。御世話でござり
ます。〔橋〕横雲にのゝめつる朝がらす。かわい
ぐわ／＼。また

婦美車紫野大尼

安永三甲午歳春陽月吉日